

## 年間第24主日

マルコ 8・27-35

2015. 9. 13

イエズス会司祭 柴田 潔

イエズス会に入る前の私の一番の趣味は車でした。12年勤めた間に6台も車を買いましたが、途中からドイツの車が好きになりました。ところが、修道者になると自分の持ち物をイエズス会に持ってくることはできません。「神様のために天に宝を積むんだ」と意気込んでいましたが、簡単には未練は消えません。夢の中で大好きな自分の車に乗ろうとします。でも、鍵が見つかりません。ポケットの中、鞆の中、何度も何度も探します。それでも見つかりません。「どうしたんだろう？」とがっかりして、しょんぼりして・・・泣く泣くあきらめて引き返す。そんな夢を何回か見ました。でも、4回目からでしょうか、同じことが起きても「これは前にも体験したことがあるシーンだ。そうだ、自分は人生を変えたんだ。だからもう車は必要ないんだ」と夢の中で自分に言い聞かせていました。

神様についていこうとすると、このようなことが起こります。私の例など小さなことですが、先週、信者講座でお話ししたフランシスコ・ザビエルの例はもっと深刻でした。彼は、傾いた実家を助けるために教区の神父さんになろうとパリ大学に進みました。24歳の若さで哲学の助教授になって、人生は順調でした。ところが、神学の勉強が3年目に入った時（もうすぐ叙階というころ）に、最愛の姉のシスター・マグダレナが亡くなってしまいます。大好きだった姉の死で、人生について考え始めます。

そんなとき、大学の寮で同じ部屋だったイグナチオは同じ言葉を何度も投げかけます。「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら何の得があるか」。初めのうちは、イグナチオのことを煙たがっていたザビエルですが、だんだんとイグナチオたちの生活が、そんなに不自然ではないように感じ始めました。イグナチオは、もう一つザビエルに大事なことを教えました。「神様は、より大きなことをするために喜んで力を貸してくださる。神様は、誰にでも必要な恵みをくださる方だと信じなさい」。イグナチオは、神様の新しいビジョンを与えました。

ザビエルは1ヶ月の黙想（霊操）を体験します。そして、「十字架にかけられたイエスが私を救ってくださる」という確信を得ます。イグナチオに出会って1年ちょっとで、ザビエルの思いは、人間の思いから神の思いに完全に変わりました。実家の繁栄という自分の思いを断念して、神の思いを生きよう、全

世界に福音を伝えよう、と新しい人生を歩み始めました。

自分や家族の思いを断念することは、十字架を背負うことになります。でも、そこから神様のより大きな計画が進んでいきます。皆さんにも、似た体験がありでしょう。神様に人生を委ねていく。そんな一週間にしていきましょう。

今日、このミサの司式をさせていただくようになったのは、今、苦しい常総の方たちを支援するためでもあります。まだ、行方がわからない方もいらっしゃいます。鬼怒川が決壊してたくさんの方が避難所で生活されています。常総教会には、普段、イエズス孝女会のシスター3人（フィリピン人、イタリア人、ポルトガル人）が住んでいますが、被害に遭われた方も身を寄せています。シスター・コンソーラさんは、昨日、避難所を訪問して話を聞いてきました。「水が引いたら片付けをしたいけど、掃除の道具がない。教会は大丈夫だけど、掃除道具をできれば支援して欲しい。教会だけでなく避難所にいる方にもお配りしたい」。(掃除道具の説明・物品とお金の支援のお願い)

私はこのことをお伝えするために来ました。自然災害は悲しいことですが、そこから私たちの優しさにもじみ出てきます。見ず知らずの人からの支援で、神様の優しさを感じる方がたくさんおられます。支援と祈りを通して神様の温かさをお伝えしましょう。